# 関学、卓球部が受け継いできたもの

卓球部　鯛中昌洋　（昭和 56 年卒）

卓球（ピンポン）は、今から約 140 年前、1880 年（明治 13 年）頃、7 つの海を支配していた大英帝国、イングランドの上流階級で始まりました。関西学院が神戸の東郊、原田の森に設立（1889 年）される少し前です。この 140 年の時代の前半（1940 年頃まで）は、ヨーロッパ勢の独壇場で、発祥国、イングランドや、新興独立国、ハンガリーの全盛時代でした。やがて、世界卓球の重心は、アジアに移っていくことになりますが、その大きな転機は、戦時色濃い、1938 年（昭和 13 年）の日本対ハンガリーの対抗戦での関西学院の大先輩、渡邊重五選手、早稲田の今孝（こんたかし）選手の大活躍でした。

140 年を越える卓球の歴史の中で、関西学院の先輩が、世界の頂点を目指し争う時期もありました。わが国の開国から少し遅れて、イングランドで卓球が始まり、しばらくして、関西学院が誕生、その後、大正デモクラシー華やかなころ、関学卓球部も誕生、まもなく、卓球部は、100 周年を迎えようとしています。わが国の開国以来の発展は、ほぼ、関西学院、卓球界の歴史であり、関学卓球部の歩みでもあります。これらを絡めまして、しばらく、思うままにお話させていただきたいと思います。

「19 世紀、世界の日の昇るところには、ユニオンジャックの国旗あり」と言われていた時代に、ピンポンがイギリス（イングランド）の上流階級の優雅な生活の中で、夕食後のレクリエーションとして広まりました。正装してプレーするのが礼儀で、まだまだ、競技というにはほど遠く、ボールもゴムボールに先立ってコルク栓を丸めてボールとし、葉巻たばこの蓋をラケットにしたという話もあります。実際、競技らしくなったのは、20 世紀に入り、セルロイド製のボールが使われてからです。わが国にピンポンが伝わったのは、日英同盟が結ばれた 1902 年（明治 35 年）でした。

1926 年（大正 15 年）に、第 1 回世界選手権が 12 月にロンドンで行われました。第一次世界大戦（1914 ～ 1918 年）後、オーストリアから独立した新興国のハンガリーが全種目に優勝しました。男子シングルス決勝は、ハンガリー同士の対戦となり、ジャコビ選手が優勝しましたが、決勝の前にスポーツ的な服装をするようにイングランドの役員がジャコビに伝えたところ、35 歳の弁護士で博士号を持つ彼は、長ズボンに革靴をはき、蝶ネクタイを締め、ベストを着てプレーをしています。ハンガリーは、この後、約 30 年前後、太平洋戦争終戦（1945 年、昭和 20 年）後まで、圧倒的な強さを誇ります。

ヨーロッパ戦争と言われる第一次世界大戦では、わが国は被害なく、「大正デモクラシー」という華やいだ時代で、大衆娯楽としてピンポンも大いに広がり、各地の学校にもピンポン部が創設されました。今、第一次世界大戦から、約 100 年になりますが、最近、東西の伝統大学で 90 ～ 100 周年行事がよく聞かれます。これは当時、各地に、卓球（ピンポン）クラブが誕生したためです。

スポーツの発展は、国家の発展、国威高揚と大きな関係があります。わが国の場合、日露戦争、第一次世界大戦を経て、大衆娯楽として始まった卓球が、国際レベルに . 高めら

れたといえます。

日増しに軍事色が強くなってきた 1938 年 1 月、世界最強と言われたハンガリーのサバドス、ケレン選手を日本に迎え、わが国初めての国際戦、「日洪国際卓球大会」が開催されました。(ハンガリーを漢字で「洪牙利」)　当時、わが国の卓球界は、今だ、鎖国状態で、世界選手権にも出場していません。

日本チーム、代表のトップにランクされたのがカット主体の今孝選手（早稲田大、全日本学生選手権 5 連覇)、フォアハンド攻撃型の渡邉重五選手（関西学院大、全日本選手権 2 連覇、甲陽学院出身）ですが、今選手は、サバドスに 2 勝 1 敗、ケレンに 2 勝、渡邉選手は、サバドスに 2 勝 1 敗、ケレンに 1 勝と、わが国初の国際戦で世界の超一琉選手に勝ち越し、新聞その他の報道でも「世界の脅威」と、その取扱いはじつに華やかでした。今や、当時を知る人はほとんどいませんが、日本学生卓球界の重鎮であられた関西学院の大先輩、西山恵之助さん（故人）が、著書、「関西学院大学　卓球部物語」の中で、大阪朝日会館でのその時の試合の様子を次のように述べています。

「舞台上に、渡邉、今の両ヒーローが、シングルスにダブルスに完璧なまでに、サバドス、ケレンを打ち砕くのを、特に渡邉の雨あられのようなロングが、突き刺さるように降り注いでいるのを驚嘆とあこがれを持って眺め、拍手をしていた。これが卓球なのか、ピンポンではないんだなと、卓球を再確認した。ハンガリーの 2 選手は、その後、各地で交歓試合を行い、日本の卓球界に大きなインパクトを与え、日本の卓球が十分に世界に通用しますよ、という置き土産を残し 2 月 12 日、帰国した。」

わが国の卓球レベルは世界水準であることが証明されましたが、ヨーロッパでは、先の日洪国際戦の翌 1939 年、9 月、遂に、ドイツがポーランドに侵略、第二次世界大戦が勃発、わが国も、1941 年（昭和 16 年)、12 月 8 日、太平洋戦争に突入してしまいます。渡邉重五選手は、関学大卒業後、奉天（現、遼寧省、瀋陽）鐘紡に勤務していた関係で、終戦後、シベリアでの抑留生活まで経験しています。

1940 年（昭和 15 年）と言うと、日本国内では、今だ、本格的な戦火に見舞われておらず、全日本選手権（明治神宮競技大会）が、10 月、東京麻布小学校で行われています。この大会では、関西学院の崔根恒選手が準優勝しましたが、のちに、関西学院に入学し、戦後、全日本選手権を 5 回制覇し、「史上最強」と呼ばれる、当時、15 才の小柄な藤井則和少年（京都三商 3 年）が、全日本学生を 5 回制覇し、「球聖」と言われた今孝選手（早稲田大）を 3 回戦で 2 対 1 で破っています。小柄な藤井少年の息もつかせぬ連続スマッシュが常勝、今選手を破ったとき、割れんばかりの拍手がおこったそうです。(藤井選手は、準決勝で崔選手に敗退。)

1945 年（昭和 20 年）までの 5 年間は、全日本選手権は開かれておりません。ただ、学生選手権は、1941、42 年（昭和 16、17 年）も開催されており、今孝選手（早稲田、昭和 11 ～ 15 年、優勝）の後を受けて、崔根恒選手（関西学院）が、単複共、全日本学生で 2 連覇（昭和 16、17 年）しています。崔根恒選手については、今や、殆ど知られていませんが、朝鮮、京城、培材中学出身、1939 年（昭和 14 年)、全日本中学選手権で、単複共に優勝しています。(今でいうインターハイ・チャンピオン)　戦前までは、朝鮮が日

本の統治下にあった関係です。左利きで豪快な流し打ちを得意とし、今選手の最大のライバルでした。ソウルの南を流れる漢江は冬季は凍結し、スケートが盛んになります。ここでも、崔選手は少年時代、スピードスケートの抜群の選手だったこともあり、その経験が、強靭な脚腰による全身バネのような卓球を生んだと言われています。

戦後､全日本を 5 回制覇し､｢史上最強｣と言われた藤井則和選手も関西学院出身ですが、藤井選手が、全く勝てなかったのが崔選手でした。藤井則和選手は、終戦後、6 年間の占領時代に、5 回、全日本選手権に出場し、全て、優勝、失ったセット、僅か 2 セットという空前の大活躍をしました。かつて、誰が「史上最強か」ということが、某卓球誌でよく話題になったことがあります。男子では、藤井則和選手というのが定番でした。

創部された大正時代から、昭和 40 年代初頭までは、紛れもなく栄光の時代、日本卓球界の創成期を東の早稲田と共にリードし、関学初の全日本チャンピオン、渡邉重五先輩から、崔根恒、西山恵之助先輩などにより、戦前の黄金期が築かれました。戦後は、史上最強と言われ、全日本 5 回優勝、ムンバイ（ボンベイ）の世界選手権で大活躍された藤井則和先輩から、昭和 40 年代初頭迄は、正に､「西の雄、関学」と言われた時代でした。

しかし、この輝かしい栄光も、昭和 40 年代のあの学生運動の最中、スポーツ推薦制度が廃止され、消え去っていきます。関学スポーツ全体が、30 年以上にわたり氷河時代にはいることになります。私が入学した 1977 年（昭和 52 年）の春季リーグ戦では、創部以来初めて、二部に陥落､「名門関学、二部落ち」という言葉が、新聞、卓球誌にも取り上げられ､行くところで叱咤され続けたことも､今思えば当然のことでした。ただ､当時は、私も含め、部員の大半が浪人経験者で、インターハイ出場者もおらず、一部残留は、そうたやすくありませんでした。4 年最後の秋季リーグ戦で一部に残留できたときは、何とも言えない解放感でした。しかし、この後、1986 年（昭和 61 年）には、四部まで陥落、部の存続すら危ぶまれました。

ただ、このような苦しい時代に、西山恵之助先輩（全日本、全日学ダブルスチャンピオン）は、私たちの時代も、後の四部の時代も、どんな時代であれ、リーグ戦の殆どをじっと見守っておられました。四部リーグの時代（1987 年、昭和 62 年）には、西山先輩は確か 65 歳くらい、自ら、ラケットを持たれ、ユニホームに短パン姿で学生の指導をされていたことは、今でも鮮明な印象として残っています。

今から、二十年余り前、西山先輩の大作「関学卓球部物語」発刊にあたり、何度か、猪名川町のご実家に寄せて頂いたとき、奥様が､｢主人は関学が好きで好きでたまらないんです｡」と言われていたことが、本当に懐かしく思われます。また、この発刊に当たり、共同通信社の当時の大阪支社長､中村精吾先輩（昭和 37 年卒）からも､貴重な資料を譲って頂いたりしました。関学卓球部は、時代を越えて、母校を思う熱い気持ちの先輩方により、暖かく守られてきたものだと実感しました。

時代も変わり、この十数年来、関学も入試制度が柔軟になり、戦力が整ってきました。卓球部も男女リーグ優勝、インカレ、ベスト 4 等、また、リーグ戦では、二十年来、聞けなかった校歌「空の翼」を聞いた時は､本当に感無量の思いでした。関学卒業生としては、この 100 年来、戦時中、戦後の苦しい時代を乗り越えてこられた先輩方の頑張り、卓球

部においては、亡くなられた西山先輩、中村先輩をはじめ、復活の日を待ち望んでおられた先輩方の思いを忘れず、また、渡邊重五先輩や多くの卒業生が卓球から離れても、それぞれの分野で社会人として立派に成功されている姿は、本来の学生スポーツを目指すものとして、真摯に受け止め、私たちが誇りとして受け継いでいきたいものだと思っています。

（写真提供『関学スポーツ』）

（写真提供『関学スポーツ』）